最優秀賞
折口信夫賞

地域文化研究部門（団体）

宮地集落の民俗誌
－石川県鳳珠郡能登町　春蘭の里－

富山・富山県立砺波高等学校
２年文系・歴史民俗班
（今多涼也、水上亮輔、越後菜月、佐伯南奈）

応募の動機

私たちが能登での地域調査で学んだことを形として残すために民俗誌（調査報告書）を作製することになり、「能登地域の素晴らしい文化を知ってもらいたい！」、「日本の過疎地域がどのような現状にあり、そこの人々がどのような思いをしているか多くの人に知ってほしい」との思いから、今回のコンテストの応募に至りました。

研究レポート内容紹介

私たちの高校では、毎年夏、２年生の理系コースは隣県の石川県・能登の臨海部へ行き、２泊３日の海の生物を調べる「臨海実習」という行事があります。しかし、文系コースにはそのような現地に赴いて調査をするという行事はありませんでした。そこで今年、「文系コースにも、同時期に２泊３日の現地で課題研究を行う機会を！」ということで、新しく文系コースにも地域調査が計画され、石川県鳳珠郡能登町「春蘭の里」の一集落、宮地集落で実施されました。

担当する調査項目の資料を読み込みながら質問事項づくり

班全員での聞き取り調査

地図の作成や座談会の録音編集

１．事前学習（調査項目の設定・質問票作成）

まず私たちは能登町・宮地集落で調べる調査項目を４人で検討し、分担を決めました。そして現地調査を行う上で、限られた期間の中で、現地の方々からスムーズに情報を聞き取る必要性から、現地調査を行う前に事前に宮地集落について調べておくことにしました。主に「能都町史」という合併前の能登町の郷土史資料を、各自が担当する項目ごとに読み込みました。その後、町史を読んで疑問や興味を持ったことを、項目ごとに現地の方に質問する内容を記した質問票を作成し、地域調査当日に備えました。

２．現地調査（聞き取り調査）

事前準備で調べたことをもとに、宮地集落で聞き取り調査を行いました。地名・年中行事・住まい・食生活など９つの調査項目を、全員で調べるもの、２人組となって調べるもの、個人で調べるものの３つのやり方で調べました。そしてそれぞれの項目を調べるのに適していると思われる住人の方の家を訪れたり、直接私たちが宿泊する所に来ていただいたりして聞き取り調査を行いました。その結果、宮地集落は昔から伝わる伝統行事や伝承文化が今も残ってはいるが、問題点も多々あるということがわかりました。

３．事後学習・座談会・まとめ（調査報告書作成）

現地調査で調査項目ごとに聞き取ったことや、それぞれの項目ごとの問題点を互いに共有する座談会を行いました。問題点としては何においても過疎と少子高齢化のため、文化の担い手となる若い人材が圧倒的に足りないということがあげられました。そしてその内容を踏まえつつ、民俗誌の原稿を書きはじめました。その後、再び座談会を開き、原稿の進捗やその集落が抱える問題点について互いに意見を深めあったりし、４人が協力して原稿を書き終え、メンバーで最終確認を行い『宮地集落の民俗誌（調査報告書）』としてまとめ上げました。

今後の課題

今回の能登町・宮地集落での現地調査から、過疎に悩む地域では「伝統文化の消滅」と戦わなければならないという厳しい現状にあることがわかりました。しかし、その地域の人々が「文化を消滅させてなるものか」と修学旅行生や外国人観光客を呼び込んだり、クラウドファンディングを行って古民家の再生を図ったりと熱意ある活動を続けています。そしてその活動を中心となって行っているのが若者ではなくご年配の方々なのです。

今回の地域調査を通して、「地域の伝承文化」を見つめ直すことがどれほど大切かを痛感しました。

受賞をきっかけに、これまで以上に地域文化の研究に取り組みたいと思います。

優秀賞

地域文化研究部門（団体）

広めよう！みゃーくふっと先人の郷土文化

沖縄県立宮古総合実業高等学校
生活福祉科
（下地笑弥華、石嶺花鈴、具志堅未玲、根間優奈）

応募の動機

平成21年ユネスコにより発表された日本の消滅の危機にある八つの言語の中に、私たちの住む宮古諸島の諸方言「みゃーくふつ（宮古口、宮古語）」が含まれています。私たちは、これまで交流のある来間島で、みゃーくふつのうちの一つである来間方言について学び、記録してきました。若い世代ではもうこの方言を使うことは難しくなっていますが、高齢者の方言の会話の中には、生き生きとした先人の知恵が含まれていると気づき、研究活動を進めてきました。その中で知ることのできた素晴らしい郷土文化を次の世代に伝承したいと思ったことが、応募のきっかけです。

研究レポート内容紹介

私たちは宮古の諸方言が絶滅の危機と知り、交流を深めている来間島で、次の１～４の活動を行いました。

１　来間方言の動画と会話集の作成

農業の学科である生活福祉科の活動にかかわりのあるテーマ「在来種の豆について」「井戸の話」「味噌の作り方・麦麹の起こし方」の三つについて、方言での会話をビデオと録音機で収録しました。方言のわかる方々の協力のもと標準語に訳し、書き起こしと訳を表示した動画を作成しました。また、来間島に観光などで来た方が方言で話してみたいと思えるように生の音声を録音した会話集の作成も行いました。これらは、宮古方言の記録のためのホームページ（URL:http://miyakogo.ryukyu ）で一部公開されています。

２　先人の知恵から学ぶ味噌作りの実践

私たちは、交流を重ねていくうちに、昔からある伝統的な味噌の存在を知りました。味噌の作り方を習得するために在来種の麦・下大豆の栽培と収穫、麦麹の起こし方、味噌づくりを、あらかじめ方言で録音・記録したデータをもとに実践してみました。材料から味噌をつくることは難しいものでしたが、昔の味噌の価値に気づくことができ、その活用法なども検討することができました。

高齢者に味噌作りを習う私たち

３　先人の知恵と方言を子供たちに伝える紙芝居の作成

方言を取材していく中で、来間島のヤーマス御願という伝統的なお祭りが続けられている理由を伝える民話を、たくさんの高齢者から聞くことができました。私たちは来間島の民話と方言を子供たちに伝えるため『来間の人々を助けた三兄弟～神様が怒ったぞぉ～』という紙芝居を作成しました。

紙芝居表紙

４　来間島での交流会・成果発表

平成30年３月に来間島の集落にある公民館で島の方々と交流会を行いました。今までの交流の中で学んだことや、私たちの活動に協力してくださったことへの感謝の気持ちをスライド発表などで伝えることができました。そして、来間島の子どもたちに、作成した紙芝居を披露しました。同じ紙芝居を３回も飽きずに見てくれている姿を見て興味を持ってくれたと実感しました。また、私たちが作った味噌で、地域の方々と味噌玉を作り、即席味噌汁として試食してもらったところ、様々な意見をいただくことができました。これからも昔の味噌作りを再現できるよう地域の方と一緒に計画しています。

今後の課題

この活動を通して、私たちは、自分たちの生まれ育った宮古島のことを知らなかったことに気づきました。そして研究を進めていく中で、「次の世代に伝えていきたい」という島への気持ちが強くなりました。今後も引き続き、井戸の話について紙芝居を作る計画があります。方言で収録した話の内容をもとに、「おばあちゃんが孫に昔の生活を伝える」形式の話にしています。これから、50年以上前の生活風景を再現できるように調べながら、紙芝居の絵を作っていく予定です。私たちの卒業後もこの活動を後輩達に引き継ぎ、来間島の伝統文化・生活・方言などを紙芝居を通し多くの方に伝えるために活用してほしいと考えています。

優秀賞

地域文化研究部門（団体）

平成最後の“祖父江の虫送り”
～杏和高校　繋がりを求めて～

愛知県立杏和高等学校
地域研究グループ
（伊藤響、立松真実、木村美穂、早川侑那、澤井翔太、飯田真世、坂東壮一郎、蓑島千東、
大島将義、山口唯月、加藤亜矢、沢田茉優、黒田航輝、東莉玖、寺澤史貴）

応募の動機

昨年に引き続き文献調査や類似行事の参加により、新たな発見がありました。虫送りの魅力を知ってもらえるような活動を総合的な時間などを使って行いました。また、「地域行事を私たちがどう引き継いでいくか」、「虫送りを広めるために何をしたらいいか」を考え、『つながり』をテーマにし、まとめました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

愛知県無形民俗文化財である祖父江の虫送りに関する活動を行ってきました。江戸時代から続く伝統行事で、祖父江の虫送りでは実盛人形と松明を使い、実盛人形を炎の中に投げ入れ昇天させることで豊作を祈ります。今回は、３年生 14 人が主に活動に関わりました。以下が活動内容です。

１）祖父江の虫送りの昨年との比較

虫送りは、実盛人形と松明作りを行う一部と虫送りを行う二部とに分かれます。今年は虫送りが行われてきたなかで初めての雨が降ったため、一日ではなく二日で行われました。

一日目、昨年よりも小中学生の参加人数が増えていました。少し活気が出てきて、地域の方々も嬉しそうでした。高校生と小学生が遊ぶなど学生同士のつながりも見られました。

二日目、一日目よりも人数は減りましたが、体格の良い高校生は太鼓を持たせてもらいました。貴重な体験ができ、松明が成す炎の行列は昨年よりも長くなっていました。地域の方や他学年との新たなつながりができたと思います。

２）民俗学的調査

文献を調べるにあたり、「平家物語」と「柳田国男全集」を活用しました。

現地調査を行った稲沢市矢合の新田地区の虫祭りでは、現代のニーズに合わせて行われていました。御幣のみを使い、北班と南班で違いが出ていて面白かったです。また、もう一つの「尾張の虫送り」である常滑市矢田の虫送りを調査しました。矢田では、縦のつながりを活かし行われていました。そのため、松明の本数や長さ、参加人数の差が著しく大きいといえます。子供の参加人数が多いことによって、活気がありました。これと比較することで祖父江の虫送りの在り方の特徴も見えてきました。

地域の伝統行事だからこそ、その地域のつながりを直接体感することができました。地域の方の行事に対する思いが聞ける貴重な時間でした。

昇天する実盛人形

３）情報発信

民族調査だけでなく、みんなで話し合った結果、虫送りの魅力を活かそうとSNS を利用して情報発信を行い地域活性化に取り組みました。

ツイートの内容は、

① 行事そのものを知ってもらうもの　② 昨年参加した時の感想
③ 斎藤実盛について　④ マンガ「さねもり君劇場」
⑤ 祖父江の虫送り豆知識　⑥ 雑感

実盛人形の前で

個性があふれているものが多く、初めて虫送りを知った方にもわかりやすい内容となったと考えています。最初は試行錯誤を重ね大変なことも多かったですが、ネットを介して奈良の高校生と交流したり、茨城の大学院生が虫送り来てくれたりと多くのつながりができました。また、つながりそのものが何よりも大切なことであることにも気づくことができました。

今後の課題として、高齢者にはSNS が利用しにくい点や系統だった説明には適していないことも明らかになりました。大学受験が終わったら虫送り専用のホームページを作りたいと考えています。また、チラシや小冊子『祖父江の虫送りAtoZ』を行事の数週間前に配り、宣伝効果を高めたいと思います。さらに今年度活動を行ってきたメンバーの大半が３年生のため、高校の後輩にこの取り組みをどう引き継いでいくかが大きな課題です。

松明を持って行列

佳　作

地域文化研究部門（団体）

2020 東京大会に向けて全国・全世界に発信したい三島―沼津間 6.6 ㎞の道

静岡県立沼津城北高等学校
情報メディア部
（小塚岳飛、水川神吾、岩元彪太郎、柿島蒼良）

応募の動機

三島－沼津間 6.6 ㎞を静岡県初の民営電気鉄道伊豆箱根鉄道軌道線が走っていた事に興味を持ち、研究調査を始めたのだが、この伊豆箱根鉄道軌道線が走っていた道は、旧東海道であり、歴史、伝統、伝説・民話等の伝承文化、食文化、文学等に関することが数多くあることがわかり、これを多くの人たちに知ってもらいたいと思い応募した。

研究レポート内容紹介・今後の課題

○研究内容

1　はじめに（テーマ設定理由）
2　伊豆箱根鉄道軌道線の現地調査
3　静岡県初の民営電気鉄道　伊豆箱根鉄道軌道線
4　三島－沼津間 6.6 ㎞の道の調査
5　まとめ（結論）
6　参考文献

現在の伊豆箱根鉄道駿豆線の広小路駅
伊豆箱根鉄道軌道線もこの駅からスタートした。駅舎は軌道線廃線当時と同じ場所にある。

千貫樋の流れ（東から西方向を見る）

対面石（清水町八幡　八幡神社境内にある）
源頼朝と義経が黄瀬川の陣で対面した時に座った石

今回の研究は、静岡県初の民営電気鉄道、伊豆箱根鉄道軌道線についてのことから始まったのだが、実際にその廃線跡を回ってみて、伊豆箱根鉄道軌道線が走っていた道が、旧東海道であり、歴史、伝統、伝説･民話等の伝承文化、食文化、文学等に関することが数多くあることがわかった。

そして、その内容が一つの研究テーマとして詳しく研究調査するべきものであることがわかった。今後私たちの部の活動として研究を行っていきたい。（具体的には、麹に関する食文化、沼津城と沼津兵学校に関すること、源頼朝に関すること、千貫樋に関係して今川氏・武田氏・北條氏の関係についてなど）

しかし、現在これらのことをこの地域の人がどれだけ知っているだろうか。ほとんど知らないのではないだろうか。こんなにも数多くあるのにとても残念に思った。ぜひ多くの人たちに知ってもらえるように、私たちはこの魅力ある道の情報を発信したいと考えた。

そのために、この地域の観光協会に協力をしていただけるようにお願いし、三島－沼津間のこの道の観光・ウォーキングマップを作成して、三島駅や沼津駅等の観光案内所に置いていただき、この魅力ある道をピーアールしたい。本当に知ってもらいたいので、できれば、見た人が実際にウォーキングしたくなるようなものを作成したい。

また、静岡県の東部・伊豆地域は 2020 年東京オリンピックの自転車競技が開催される。その自転車競技の応援や観戦のために多くの人が全国から訪れる。

その人たちにもこの道の魅力を発信したい。さらに、東京オリンピックであるので、世界から応援や観戦に人々が訪れる。その世界から来る人々にもこの道の魅力を発信したい。そのためには、英語版のウォーキングマップを作成する必要があるので、本校の英語の先生に協力していただき、英語版のウォーキングマップを完成させたい。

このように、今回の研究で私たちは、この道には多くの魅力があることがわかった。この道の魅力を、本当に地域の人々、2020 年東京大会（東京オリンピック）に向けて、静岡県東部地域を訪れる、全国･全世界の人々に知ってもらえるように、今後２年間様々な情報発信の取り組みを行い努力していきたいと考えている。

佳　作

地域文化研究部門（団体）

自分たちの足元をみつめる
～我が家のお雑煮から“今”を考える～

愛知県立杏和高等学校
旧２年３組お雑煮調べ隊
（澤井翔太、蓑島千東、東莉玖　など計 39 名）

応募の動機

私たちは、日本史の授業を通して様々な日本の文化や生活について学習してきました。当時の私たちのクラスには歴史好きな生徒が多く、担任の先生から「何か日本文化について調べてみないか」と提案がありました。私たちはぜひ何か調べたいと思い、日本文化の中で楽しく調べやすいものはないかを中心メンバーで話し合いました。その結果、正月はたいていの家で作っているお雑煮に家庭・地域による差があるか調べてみることになりました。

研究レポート内容紹介

主に行ったことは以下のことです。

１）我が家のお雑煮レポート

冬休みに１人１人が自分の家のお雑煮をレポートにして（お雑煮を家で作らない人は「我が家のお正月」をレポート）、比較を行いました。お雑煮は尾張西部のものが 19 と多かったのですが、新潟県、熊本県、滋賀県など、様々な県のものも少数ながら集まりました。比較したのは、地域による餅の種類、餅の処理（＝焼いてから煮るか、そのまま煮るか）、味付け、だし、具 の５つです。比較をして驚いたことは、尾張西部ではほとんど味付けが醤油なのに対して、滋賀県では白みそを使っていたり、尾張西部ではほとんどが、具が餅菜（正月菜）だけなのに対して、新潟県では他地域と比べ物にならないほど多くの具が入っていたことなどです。餅菜と小松菜があまりにも似ていたため、JA 愛知西の方に問い合わせたところ、正式には餅菜と小松菜は葉が生える位置などが違う葉物野菜であることがわかりました。現在では小松菜が餅菜として売られていることがあることも知りました。また、尾張西部のほとんどでは、だしがカツオ節なのに対して、熊本県ではスルメを使っていたり、新潟県では鶏ガラを使っているなど、だしでも各地域の特徴があることがわかりました。興味深いのは化学調味料を使う家庭が少なくなかったということです。これは昔にはない、現代ならではの傾向だと考えました。

愛知のお雑煮

愛知のお雑煮にはいる餅菜

２）追加調査

１）のあとに追加調査を行い、「将来もお雑煮を続けたいか」とクラスのメンバーに尋ねたところ、ほとんどの人が今後も続けたいと回答しました。ここから、お雑煮は将来も残っていく可能性が高いという結論となりました。

３）お雑煮に関する文献を読んで

クラスの数名で、正月やお雑煮に関する本を読んで調べました。正月やお雑煮が何を意味するのか私たちは考えたことがなかったので、驚くことばかりでした。「お雑煮は三が日に食べるもの」という認識が私たちの頭の中には色濃く存在していましたが、文献から三が日以外にも「４日から 10 日までの雑煮」など、時期によってことなるお雑煮があることを初めて知り、驚きました。また、昔は正月でみんな１歳ずつ年をとる「お年取り」という考え方が存在することは、私たちにとって衝撃的でした。正月に餅を食べることで「命の更新」をして、次の１年を生き抜くエネルギーを蓄えるという記述もあり、興味深いものでした。

さらにお雑煮を食べることが、神様から力を受け取るための儀式的な一面を持っていることや、正月に餅を一切食べない「餅なし正月」という風習が一部の地域に存在しているということも知ることができ、正月とお雑煮に人々の深い想いが込められていることを実感しました。

今後の課題

今回の比較では、正月に自分たちが食べるお雑煮について調べましたが、30 名ほどのクラスだけでも、色々な違いを発見することができました。この企画をきっかけにお雑煮を初めて作った仲間が何人もいたので、このことも文化を知るうえでよかったことだと思います。今回調べたことから新たな意見を示すことはできませんでしたが、正月やお雑煮について多くの知識を学び、考えることができたので、今まで何気なく過ごしていた正月がさらに魅力的なものとして目の前に現れ、新鮮な気持ちで過ごせるのではないかと感じました。さらには正月の象徴ともいえる餅を食べない地域があることも知り、私たちが当たり前だと思っていた「正月」が、必ずしも全国の当たり前ではないという事実にも気づくことができました。これを機に、様々な地域のお雑煮や正月の違いについて調べてみたいと思いました。今後の課題としては、今回は１つのクラス内で比較を行いましたが、学年などのもう少し視野（範囲）を広げてより多くのレポートを集めて比較をすれば、さらに地域ごとのお雑煮の違いについて考えを深められたと思います。今後も多くの人にお雑煮について話を伺い、私たちなりの考えを深めていきたいと考えています。

クラスのメンバーで互いの家のお雑煮や正月を知り、共有することができたのは、自分が知らない他の地域や自分の住む地域に目を向けるきっかけとなる本当に良い経験でした。ありがとうございました。

最優秀賞

地域文化研究部門（個人）

漬物で語る
～『知らない』と『忘れる』に立ち向かう人々～

愛知県立杏和高等学校　３年
飯　田　真　世

応募の動機

昨年私は「漬物は語る～世界に誇る日本食の起源とは～」を書き、同コンテストで優秀賞を受賞しました。そこで、民俗学研究の楽しさと魅力を知ったとともに、最優秀賞に手が届かなかった悔しさを味わいました。そのため、さらなる漬物の魅力を知りたい気持ちとリベンジしたい気持ちが芽生え、研究の持続とコンテスト応募を決めました。前回の論文では文献資料の読み取りから漬物の歴史について学んだため、今回は聞き取り調査を中心に、漬物のこれからについて研究しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

１．香の物の漬けなおしとの出会い

昨年研究のために参加した香の物祭りで、敬神婦人結の会と書かれたテントの下で２種類の香の物をふるまっている場面に遭遇しました。話を聞くと、昨年香の物祭の漬け込み神事で漬けられた香の物のあまりと、漬けなおしをした香の物だといいます。そこではじめて、敬神婦人会結の会が行っている香の物の漬けなおしを知りました。そこに、香の物の今後が関わっているのではないかと感じた私は、研究の対象を香の物の漬けなおしに決めました。

２．敬神婦人結の会への聞き込み

香の物の漬けなおしについての研究をする上で、敬神婦人結の会の役員への聞き取り調査を行いました。漬けなおしを始めたきっかけは、香の物祭りの漬け込み神事で漬け込んだ野菜は熱田神宮に奉納されますが、その数が決まっており余りが出るからだそうです。元々、その余りは埋めていたそうですが、本当は熱田神宮の神様が口にする食べ物なのに埋めてしまっていいのか、もったいない、という思いがあったとのこと。しかし、漬け込み神事で一年間塩漬けされているため食べることはできません。そこで、香の物の漬けなおしが始まったそうです。その他聞き取り調査で以下のことを明らかにしました。

・活動を始めて５年目
・塩漬け１年後かかる年数は＋２年
・塩出し（水）約３日→粕漬け２回→本漬け（ザラメ）１回
・「藪に神の物」の香の物として食べていただけることに意味がある

聞き取り調査を通して、香の物の漬けなおしに関するお話を深く聞くことができました。その中で、香の物の歴史を繋ぎ伝えるため、努力を惜しまず戦い続ける様子が見えました。２年という長い時間をかけ、神様にお供えする香の物を氏子や参列者の口に届ける活動の本意は、やはり敬神の気持ちだということがわかりました。

漬け物を漬ける私

敬神婦人結の会の方と

３．２年目の香の物祭りへ

毎年８月 21 日に萱津神社にて香の物祭りは開催されます。今年も８月 21 日火曜日に盛大に開催され、本殿祭から漬け込み神事まで参加しました。わずか２度しか参加はしていませんが、その短い時間の中でも歴史が刻まれていく感覚を覚えました。

今後の課題

私は２年間香の物や萱津神社について研究をしました。今後の課題は、ここで終わらないことだと思います。今後も香の物祭りに参加し続け、自分の生まれ育った地域を思い考えることを怠らないようにしていきたいです。

優秀賞

地域文化研究部門（個人）

福井県敦賀市の伝統行事、「敦賀まつり」について

東京・広尾学園高等学校　２年
荒　殿　一　花

応募の動機

夏休みを利用し、お盆のお墓参りを兼ねて祖父の出身地である福井県敦賀市を訪ねた。その昔、敦賀市は港を埋め尽くすほど多くの船が行きかい、要衝として栄えた時代があったというが、今では過疎化しさびれてしまっていた。駅前の商店街の多くがシャッターを閉じたままで、人影はまばらであった。しかし、年に一度の「敦賀まつり」になると、大勢の人が集まり、町に活気を呼び戻すと聞き、資料館や図書館を訪れて調査を行った。

研究レポート内容紹介・今後の課題

「敦賀まつり」は、地元の由緒ある気比神宮（神社）の秋季例大祭が、敦賀市民の祭りとして継承されている祭りだ。毎年、９月２日から 15 日にかけて執り行われている例祭の中で、９月４日に開催される例大祭では、山車（「だし」と読まずに「やま」と読む）の巡行が最大の見所だという。

山車を展示している「みなとつるが山車会館」があるときき行ってみた。そこは、敦賀まつりで町を練り歩く現役の山車が６基すべて収納されていて、そのうちの３基が展示されていた。山車の大きさは高さ３メートル、飾り付けをすると８メートルになることもあると知って、その迫力に驚いた。実は 1945 年７月 12 日の空襲で敦賀市が壊滅的な打撃を受け、山車や神輿の大部分が焼けてしまい、今日存在する６基の山車の多くは平成になってから復元されたものだという。この大きな山車は、豪華な装飾で重量もかさみ、たくさんの人で曳かなければ動かないようなものだが、昔は多いときに 50 基も練り歩いていたと知り、再び驚いた。

敦賀まつりが由来する気比神宮を訪ねた。入り口には、日本三大鳥居に数えられる朱色の大鳥居が構え、歴史を感じた。敦賀市立図書館に行って調べたところ、『古事記』に登場する気比神宮の主祭神、伊奢沙別命（いさざわけのみこと）は大和朝廷と交わり、重視されていたという。その後も、遣唐使の廃止以降途絶えていた大陸との交流において栄えた敦賀の気比神宮の役割は、祭祀を務めるだけでなく、外交面でも、ともすれば軍事的にも重要だったという。中世になると「北陸道総鎮守」とも称され、北陸一帯に多くの社領を有していたが、戦国時代になると、織田信長の侵攻によって社殿のほとんどを消失し、著しく衰退。江戸時代になると、再興され、かつての繁栄は見られなくなったと言われるものの、その一方で、祭りの華やかさは盛大になったという。

気比神宮の大鳥居を訪ねて

敦賀の山車の起源は定かではないが、室町末期には成立していたそうだ。中世末期～近世初期にかけて敦賀湊（港）が最も栄え、海路で運ぶ様々な物品を取引する商人たちが大きな力を持ったことと、山車の発展は深い関係があるという。

みなとつるが山車会館にて展示されていた山車

『古事記』には、気比神宮の主祭神、伊奢沙別命は、食料や海の恵み、海の安全を守護する神、「御食津（みけつ）大神」という別名でも記されていたという。敦賀が往来の拠点としてだけでなく、天然の良港を有し、海産物朝貢地であったことも反映して、祭神が食物神としての性格をもつのだそうだ。そのせいもあってか、祭りは食べることと深く結びついていることに気づいた。例えば秋の例大祭での山車の曳出し順を決めるために行われていた「牛腸祭」についても、かつては料理の品数が 36 品目（1792 年の記録）や、29 品目（1851 年）にも及び、鯛を焼いたり、京都へたけのこや茄子などの食材を注文したり、饅頭などの土産も大量に用意するほど、多額な負担と細心の神経を払っていたという。（現在は形をかえて毎年６月 16 日に行われている。）

敦賀市立博物館にて敦賀の歴史を調べる

今後、調べきれなかった祭りと食についてを本格的に考察してみたいと考えている。当時盛大だった食文化が、今どのように継承されているか、変遷を具体的に調べたい。また、今回は敦賀まつりを見ることができなかったが、来年は実際に見に行き、より深く調査を行いたいと思っている。

優秀賞

地域文化研究部門（個人）

変化していく音頭
～音頭から始まる流行音楽のかたち～

愛媛・済美平成中等教育学校　４年
武　井　千　夏

応募の動機

私は小学生の頃、ダンスを習っていたということもあって歌やダンスに興味があり、よく音楽番組を見ていた。その時の出演者の話で海外の振付師の方に振付けてもらったというのを聞き、日本の文化の中でいわゆるダンスといわれるものは何かと考えた。すると、思い浮かんだのが「～音頭」、「盆踊り」というものであった。しかし、最近は音頭という言葉をあまり聞かなくなったように思える。だからこの論文をきっかけに音頭や盆踊りのことをもっとたくさんの人に知ってほしいと思った。その中で、このコンテストを担任の先生から教えていただき、音頭をより知ってもらえるきっかけになればと応募した。

研究レポート内容紹介・今後の課題

「音頭」という言葉は、現在の日本では死語になりつつあるといわれている。まず、「音頭」という言葉の意味を調べてみると、音頭とは民族舞踊またはその歌のことであった。踊りと歌とが一体になったところに特徴があるようだ。また、音頭は古来から存在しているとも言われているが、そのルーツはいつごろまでさかのぼることができるだろうか。それは、なんと何千年も前にもさかのぼり「雅楽」にあるということである。当時は呼び方も違っており「オンドウ」とよばれていて、意味も各管楽器の首席奏者のことであった。また、現在も残っている音頭には、明治末期から昭和初期に流布したものが多く、その背景にはレコードが普及したことが大きいようであった。

愛媛県伊予郡松前町夏祭り

このように、音頭には「古い」などというイメージがつきやすいが、現在の日本でも結構使われている。なかでも代表的なものが「アニソン音頭」である。これにより、明治時代以前の伝承音頭とは全く切り離された形にはなったが、子供たちのなかでもよく話題になったりするなどして新たな進化を遂げている。また、日本のアニメが海外で注目されるようになり、戦時中の植民地支配などで昔から音頭が広がっていたアジアや南米だけでなく、日本文化が注目されるようになった地域、たとえばヨーロッパなどにも音頭が広がっていく可能性があるように思われる。

義農作兵衛像

今後の課題としては、音頭を世界中に広めるにはこれまでと異なる方法で広める必要があるように思える。その方法として考えられるのはやはりアニメを用いることである。これまで日本で音頭が広まるきっかけになったのは、オリンピックのような大きな国家的事業が関係している。たとえば、東京オリンピックで「東京五輪音頭」がヒットしたあとに、アニメの世界で「オバQ音頭」がヒットした。だから、2020年東京オリンピックの際に再度、アニメに音頭をのせて海外に伝えていくことが可能であるように思われる。

佳　作

地域文化研究部門（個人）

関西弁は日本語習得の良いツールとなりえるのか
～外国人の第二言語習得からみた関西弁～

東京・渋谷教育学園渋谷高等学校　２年
弓　場　鈴　響

応募の動機

私は関西で育った後東京に来たため、関西弁で考え、それを頭の中で標準語に翻訳していました。こういった脳内の変換経験が外国語の習得に役立たないかと思い、調べ始めたのが研究のスタートです。様々な文献を調べるうちに、そもそも２つの異なる言語として関西弁と標準語を捉え、言語を取得する方法についてより深く調べようと思いました。また外国語学習に耳からの情報も大きな役割を果たしていると知り、関西弁の独特なイントネーションやアクセントを生かして、外国人に効率的な学習を提供できないかと考えたことが、このテーマへ繋がっています。方言という地域文化の研究でもあったため、ここに応募しました。

研究レポート内容紹介

１．関西弁の特徴

関西弁の特徴の一つとして母音を明瞭に発音することがある。そのためローマ字で発音を学んだ外国人には聞き取りやすいといわれている。また関西弁のアクセントは高さのイントネーションが高くはじまる（高起式）か、低くはじまる（低起式）かと、高い音が低い音に変わる場所（アクセント核の位置）という二つの要素をもとに決まる。関西弁の高くはじまるｎ拍の単語には、いずれかの拍にアクセントの核がおかれるか、全く置かれないかのｎ＋１個のアクセント型、低くはじまるｎ拍の単語では、第一拍にアクセント核が来ないため(n+1)-1=n 個のバリエーションがある。この両者を足すと関西弁のｎ拍の単語は、2n ＋１個ものアクセント型のバリエーションを持ち合わせている。したがって関西弁は日本語学習における導入語として有効であるのではないかと考えた。

関西弁語彙や音声再現の検証資料

関西弁音声の検証結果について執筆中

２．留学生の関西弁再現

学生２人へのインタビューにより、「関西弁による授業経験の有無」、「関西弁への印象」、「関西弁の語彙力」を確認し、「ヒアリングした関西弁の理解及びイントネーションの再現」を検証した。２人とも現地の大学や独学で教科書を使って勉強したのち日本に留学し、標準語のアクセントを習得した。大学やテレビなどで関西弁を耳にする機会があるため、関西弁になじみがあり、一部の語彙は使えた。音源を再現する検証では、関西弁が特徴的なイントネーションであるため、聞いた直後は再現できた。

３．日本語学習における関西弁の有効性

関西弁の発音の特徴が日本語学習者に与える影響には、音の高低とアクセント核という二つの要素がある。中国語話者などに音の高低を理解しやすいというメリットを持つかもしれないが、標準語に比べて複雑で、規則的でない部分もあるため、難しくなりやすい。また現在日本では標準語で教えることになっていて、関西弁で日本語を教えることはないものの、関西弁に関する講義などは設置されている。

今後の課題

関西弁の母音優勢による聞き取りやすさや、標準語には存在しないアクセントの耳への残りやすさが日本語を学ぶ外国人にあることが分かった。しかし、現状日本語教育は基本的に標準語で行うことになっていて、関西弁をはじめとした方言の授業はあるものの、実際に関西弁で授業は行われていない。そして関西弁のアクセントの多様さを踏まえると、関西弁での日本語教育は難しいと思われる。

しかし、筆者自身は関西弁に対して持たれるフレンドリー・明るいといった印象は日常会話で有効になりえると考えている。引き続き、関西弁を利用した日本語学習の方法を模索していきたい。そして関西弁という方言に触れることによって、日本の良さを知ってもらうことができたらうれしく思う。

佳　作

地域文化研究部門（個人）

報恩の民『台湾少年工』は日本統治時代における犠牲者でしかないのか

神奈川県立横浜国際高等学校　３年
矢　川　優　里

応募の動機

大和市立中学校に進学した私は、同市教育委員会教育研究所編集『社会科副読本大和』を受け取った。大和・海老名・座間の三都市にまたがる地に移住し軍事工員として勤務した元台湾少年工：張振栄氏の回想録には、一部要約という但し書きが添えられ、当時の苦労や恐怖を綴った箇所だけが抜き出され掲載されている。在りし日の日本は、弾圧や略奪に満ちた独裁的統治しか行っていなかったのだろうか？地元自治体独自の社会科副読本が、次世代につなぐに相応しい副読本であるか否かを検証する必要がある。《台湾人を同胞として併合し共に発展しようとした日本》という視点で調査するとともに《統治された側から観る本音》の掘り下げを行う事にした。

研究レポート内容紹介

第１章．平和都市宣言と教育《多数決では何も決められない条例の危険性と副読本》

《日台の関係に間接的悪影響が及んでいく恐れがある》と思われる大和市独自の宣言、条例、並びに《自由裁量教育として許容される》教員指導用資料集と副読本の問題点を紹介。改善された箇所の経緯も説明した。

第２章．台湾史教科書認識台湾から読み解く少年工たちの歴史的背景

台湾初の自国史教科書である『認識台湾』の和訳本『台湾を知る』（蔡易達・永山英樹訳、2000 年発行書籍）から注目した箇所を、公的物証として活用した。

50 年もの間同胞であった台湾本省人と日本人は、1945 年９月２日以降別々の国に付随する民となり諸外国からの干渉を受け続ける曖昧な立場になった。その双方が政治的軋轢の中、どのような歴史的認識を表し変化させていったのだろうか。台湾との絆を固く信じ、台湾を台湾国として尊重する日本になるよう願う日本人の立場から、重要と思う箇所を抜き出し、比較検証を行った。

第３章．高座日台交流の会会長石川公弘氏の著書を介して知る台湾少年工の証言録

石川公弘氏が書かれた著書『二つの祖国を生きた台湾少年工』を、信憑性高く最も重要な参考文献として選出。著者自らのご意見をうかがう機会にも恵まれた。当研究における主軸として活用した石川氏の著書には、日本からの国交断絶や国民党による戒厳令を経た今尚、第二の祖国と慕い影に日向に寄り添いながら支えて下さる元少年工たちの体験が高い表現力で綴られている。元台湾総統：李登輝氏が述べた推薦の辞の一部と元少年工たちの手記を順次要約し紹介した。

高座海軍工廠跡を臨む 座間市芹沢公園内に建立されたばかりの《台湾少年工（海軍軍属）顕彰碑》
《二つの祖国を生きた台湾少年工》の著者：石川公弘氏に研究レポートの趣旨を説明して聞き込みを行った。

大和市が所蔵する《高座海軍工廠関係資料集》内に年端もいかない少年工当時の日記を見つけた。
日本を祖国同様に愛し守ろうとする純粋な気持ちが伝わりただひたすらにありがたいと思った。

今後の課題

台湾最大の知日団体 台湾少年工 同窓組織 台湾高座会の方々が、第二の故郷として格別の想いを寄せる地が大和市である。大和市の有志各位が 行政主導の姉妹都市交流化を願い働きかけてきたが、その都度、その願いは軽視されてきた。台湾人との交流政策案を頑なに退け続ける 大和市長 大木哲氏に対し、同じ高座の地であった綾瀬市・海老名市・座間市との連携で交流する計画案に切り替えて願ってもなお、大和市長だけが反対の姿勢を崩さない。疑問を払いきれない宣言や条例の存在 並びに 独裁的とも思える多大な市長裁量の数々に気がついた。

今後の課題としては、現実的かつ具体的なアプローチを実践していけるよう法学を身につけ 大和市を諦めない方々に学びたい。

地域文化研究部門選評

國學院大學教授　新谷　尚紀

■総評

高校生の皆さん、若い人たちの研究意欲には、実にたくさんの可能性が秘められています。①疑問を発する力、②調べる力、③分析して結論にまとめる力、その３つこそが貴重な研究の力です。これからもその３つをずっと大切にしてください。ただ、若者の素朴な意欲に対しては、よい指導基準が示されることが大事です。みなさんはその、よい指導基準を示していただける先生方に恵まれて、ほんとうによかったですね。

一般的に研究成果についての評価基準として共通しているのは、専門の研究者の場合でも同じなのですが、以下の５つの点です。１．問題発見や着想の上での独自性、２．情報収集の上での直接性や確実性、３．情報整理の上での論理的工夫や努力の跡、４．立論の手順における論理的実証性、５．結論としての新たな知見の明確性、です。このコンテストに参加した高校生のみなさんの場合もこれを基準として読んでみました。１．の問題発見については、入賞作のすべてが身近な問題発見から出発しており、高く評価できました。２．３．はやはり文献調査と歴史情報の確認を行なった上で実際の現地調査と現場情報のていねいな収集ができているかどうか、という点が重要です。文献調査と民俗調査との両立ができている場合は評価が高くなります。４．５．はハイレベルな要求ということになりますが、若い高校生のみなさんと、現場で指導しておられる先生方との熱意が感じられる応募作品が多かったと思います。これからも、上記の１．から５．の評価基準を参考にして、このような実際的な学問探求が若い人たちによって積み重ねられていくと、日本の学問の未来も大きく開けていくにちがいないと思います。

■団体の部

最優秀賞・折口信夫賞

「宮地集落の民俗誌　－石川県鳳珠郡能登町　春蘭の里－」

富山県立砺波高等学校

2年文系・歴史民俗班

能登の宮地集落を調査対象に選んでの民俗誌ですね。たいへんよく調査してあります。事前の準備もしっかりしてから現地に赴き、現地の人たちとのコミュニケーションもよくとれており、貴重な情報の収集もできています。たった４人なのに、先生の適切な指導のもとに、初心者とは思えないほどの質のよい民俗誌ができあがっています。きっと、この調査研究に取り組む前の４人と、この民俗誌を完成させたあとの４人は、人間としての幅と深みが大きく異なるほどに成長していることと思います。よいしごとをすると人はみんな変わるのです。評価される点をあげておけば、以下のとおりです。一、豊富な資料情報を収集して民俗誌というかたちに仕上げて完成させている点です。なかなかの努力がなければこのように仕上げることはできません。それを実現している点が高く評価されます。二、準備から実施、そしてその後の座談会や感想文まで、全体を記録しておいたことです。調査と実施の具体的な運びが次に続く人たちにも参考になるでしょう。三、地名、屋号、年中行事、人生儀礼、食生活、住まい、信仰、伝説とそれぞれを詳しく調査している点です。この経験を生かしてこれからもがんばってください。

優秀賞

「広めよう！みゃーくふっと先人の郷土文化」

沖縄県立宮古総合実業高等学校

生活福祉科

「みゃーくふっ」と言われる宮古島の方言を、とくに来間島で調査をしていますね。評価できる点は多いのですが、たとえば以下のような点です。一、方言の調査だけでなく、生活や生産の現場での言葉についての調査を試みているので、現場ごとの生きた貴重な資料が収集できている点、二、先人の知恵から学ぶという姿勢になっており、味噌作りの実践から先人の知恵や技能についても、貴重な情報が収集されている点、三、その先人の知恵や方言を子供たちに伝えるために、紙芝居を作るなどの工夫と努力をしている点、そして、調査地での交流会や成果の発表などで情報発信をして、しっかりと社会還元しているという点、などです。これからもがんばってください。

優秀賞

「平成最後の“祖父江の虫送り”　～杏和高校　繋がりを求めて～」

愛知県立杏和高等学校

地域研究グループ

この祖父江の虫送り行事については、五年目になる継続的な調査ですね。よくがんばりましたね。先輩がこれまで調べてきたこともよく学習して、それをふまえながら自分たちの手でしっかりと調査をしている点

がまずは評価できます。以下、評価できる点をあげておきます。一、集まった15人のほとんどが２年連続参加で、地域の人たちとのコミュニケーションがよくできていて、観察が詳しくなっていた点、二、連続参加の有利な点として､調査地点を増やしたことも含めて、昨年度と今年度との共通の部分とちがっていた部分とによく注目できている点、豊富な写真とリアルな現場体験がよく描きとどめられている点、三、しっかりと情報発信をしている点、などが評価されます。などです。これからもがんばってください。

佳作

「2020東京大会に向けて全国・全世界に発信したい三島－沼津間6.6㎞の道」

静岡県立沼津城北高等学校

情報メディア部

地元の、伊豆箱根鉄道軌道線の歴史についてよく調べていますね。評価できる点は以下の通りです。一、沼津市博物館の紀要などをまず参考にして基礎情報を集め、その後実際に三島から沼津まで約6.6キロの軌道線跡を実際に回ってよく調査している点、二、明治29年（1896）の駿豆電気株式会社の創設から、明治39年（1906）の開業へ、そして大正時代の黄金期へ、しかし、戦後はバスとの競合に苦戦し、昭和36年（1961）６月の集中豪雨で黄瀬川橋の流失をへて昭和38年（1963）ついに、57年の幕を閉じるまでの歴史がよくたどられている点、三、軌道線が走っていたのは旧東海道であったことを知り、歴史的な史跡や寺社などの調査に広げている点、新旧の貴重な写真データを収集している点、などです。これからもがんばってください。

佳作

「自分たちの足元をみつめる　～我が家のお雑煮から“今”を考える～」

愛知県立杏和高等学校

旧2年3組お雑煮調べ隊

雑煮については日本各地でちがいがあり、よく話題になりますが、自分たちの足元から見つめてみようとしたのはよい着目です。評価できる点は以下の通りです。一、尾張西部の19事例、三河２事例、岐阜県１事例、三重県３事例、滋賀県１事例、さらには新潟県２事例、熊本県１事例まで集めて、丸餅か角餅か、焼くか焼かぬか、味噌か醤油か、鰹節などのだしの種類、具材のいろいろ、などが整理され比較されて表に示されている点、二、文化庁関連の図書や、粕谷浩子氏の著作などの参考文献を参考にしてよく情報整理している点、また民俗学関係の餅や雑煮についての参考文献からよく学んでいる点、三、具体的なクラスの生徒30人ほどの家の雑煮を写真と共にその情報をよく集めている点、などです。これからもがんばってください。

■個人の部

最優秀賞

「漬物で語る　～『知らない』と『忘れる』に立ち向かう人々～」

愛知県立杏和高等学校

飯田　真世

「漬物」についての身近な疑問から、しっかりと関連する情報を集めてよくまとめましたね。漬物はたしかに、日本の伝統的な食文化の中でも重要なものです。日本各地の漬物文化に関連する資料情報の収集と比較、そこから地理的な地域差や、歴史的な漬物の変遷史を明らかにしていくといいですね。これは一地域の追跡ながら貴重な研究でした。評価できる点をあげておきましょう。一､旧甚目寺町にある萱津神社の「香の物祭り」を中心に、その祭りに参加しての調査情報をよく集めており、写真データなどで分かりやすく示している点、二、熱田神宮との関係まで聞き取りできており、印刷物ではあるがその関連資料も入手して歴史的な追跡も試みている点、三、萱津神社の宮司さんへの聞き取り調査情報も貴重で、また後半の部分に、関連する文献類やパンフレットなどの情報を数多く掲示して参考に供している点、などです。これからもがんばってください。

優秀賞

「福井県敦賀市の伝統行事､「敦賀まつり」について」

東京・広尾学園高等学校

荒殿　一花

自分の祖父の出身地である福井県敦賀市の「敦賀まつり」についての調査ですね。評価できる点は以下の通りです。一、敦賀まつりのルーツが、気比神宮の例祭にあることを記録類を調べてから現場感覚でよく記述している点、二、牛腸祭りとごちそうについて注目している点、三、新聞記事などをよく集めている点、山車いろいろとともに昭和初期の写真なども示している点、などです。これからも敦賀市の変化を追いながら、調査を進めて行くといいですね。

優秀賞

「変化していく音頭　～音頭から始まる流行音楽のかたち～」

愛媛・済美平成中等教育学校

武井　千夏

音頭と流行音楽の関係について追跡してみたものですね。評価できる点としては、以下の通りです。一、音頭の歴史と音頭のいろいろとをよく調べている点、二、とくに地元の松前音頭について、その音頭の特徴と、義農作兵衛の伝説や、おたたさんのことも追跡してしている点、三、アジアや南米までも音頭が広まっていることをよく調べている点、盆踊り唄とその他の音楽の種類と特徴について比較して、音頭では単旋律中心で､和音の使われない傾向などに注目している点、などです。これからもがんばってください。

佳作

「関西弁は日本語習得の良いツールとなりえるのか
～外国人の第二言語習得からみた関西弁～」

東京・渋谷教育学園渋谷高等学校

弓場　鈴響

あまり民俗学との関係は深くないような挑戦ですが、興味深いアプローチをしていますね。評価できる点としては以下の通りです。標準語と関西弁についてのいくつかの文献を読んで先行研究をふまえてから取り組もうとしている点、二、関西弁の特徴についてもよく整理して、インタビュー調査の組み立てもをよく準備している点、山下好孝『関西弁講義』を読んで著者に教えをうけているようですが、その姿勢もたいへんよいと思います。三、発音やイントネーションの比較から、外国人の日本語習得によいツールとなるかもしれない可能性を導き出している点、数は少ないけれども実際に外国人にインタビューして確かめようとしている点､などです。これからもがんばってください。

佳作

「報恩の民『台湾少年工』は日本統治時代における犠牲者でしかないのか」

神奈川県立横浜国際高等学校

矢川　優里

地元の、大和市関係の歴史教本から、台湾少年工の存在とその歴史を知り、しっかりと調べてみたものですね。評価できる点は以下の通りです。一、元台湾少年工の回想録をよく読んで、当時の技師の早川金次氏の活動に注目して、いくつもの大切な事実があったことを発見している点、二、『認識台湾』をはじめとする貴重な文献を読んで、日本統治時代の歴史をよく追跡しようとしている点、三、複雑な交流の現状についても、その歴史的な中での理解を求めようとしている点、関係者の手紙類などの史料にもよく注意して、複雑な歴史の動向について整理しようとしている点、などです、国際関係の複雑化の中でも平和へ向けた姿勢を大切にしていく上で、これからも調査や勉強がたいせつです。がんばってください。

地域文化研究部門選評

国立歴史民俗博物館　名誉教授　常光　徹

■総評

今回も充実した作品が揃いました。とくに、折口信夫賞に輝いた砺波高等学校の『宮地集落の民俗誌』は、事前の準備から現地調査、成果のまとめまで、四人の班員が議論を重ねながら作り上げた質の高い報告書です。民俗学の根底には、私たちの目の前の生活のあり方に対する関心や疑問が横たわっています。聞き書きなどの手法を用いて、歴史的な移り変わりの姿や、そこにこめられた人々の知と技、心意を明らかにしていくところに特徴があると思います。その意味で、常に身辺に生起する話題に関心をもつことが大切です。作品を読んでいて感ずるのは、先生方の指導のすばらしさです。とりわけ、団体の部は、テーマの設定から現地との連絡、調査方法や成果のまとめ方など、適切な指導なしには充実した作品に結実するのは難しいでしょう。改めて先生方のご指導に感謝申し上げます。

■団体の部

最優秀賞・折口信夫賞

「宮地集落の民俗誌　－石川県鳳珠郡能登町　春蘭の里－」

富山県立砺波高等学校

2年文系・歴史民俗班

四人の班員が協力してまとめた力作である。調査地に関する文献の収集や学習を重ねたうえで、調査項目の設定や役割分担を行うなど、周到な事前の準備が現地での聞き書きによく生かされている。伝統文化を踏まえた宮地集落の現在の生活が生き生きと伝わってくる内容で、地元の抱えている課題のいくつかもここから見えてくる。限られた調査期間のなかで、実にさまざまな情報を得ていることがわかるし、収集したデータを写真や図を駆使してわかりやすくまとめている点も評価される。

優秀賞

「広めよう！みゃーくふっと先人の郷土文化」

沖縄県立宮古総合実業高等学校

生活福祉科

宮古市来間島の方言のなかにこめられた生活の知恵に着目し、丁寧な聞き書きをもとに、地元の伝承文化の実態に迫る活動である。動画の作成・味噌づくり・紙芝居など具体的な実践活動を通して、先人が蓄積してきた生活の知恵と技を学んでいる。調査から得た成果は交流会の場を通して発表し、現在の人々の生活との関わりを模索している点が大切で、新たな展望が生まれている。添付資料の「井戸（カー）の話」は、生活の実感がよく表現されていて興味深い内容だった。

優秀賞

「平成最後の“祖父江の虫送り”　～杏和高校　繋がりを求めて～」

愛知県立杏和高等学校

地域研究グループ

毎年、祖父江の虫送りを調査をし、その成果を積み重ねている。一つのテーマに継続的に取り組むことで、年々知識が蓄積されるとともに、常に新たな発見があり、また新たな課題が生まれていることがわかる。近隣地区の虫送りや常滑市矢田地区の虫送り調査は、現在行われている行事の実態を的確にとらえており、祖父江の虫送りとの違いや共通点を浮き彫りにしていて興味深い。文献調査や情報発信の取り組みにも意欲的で、今後の展開と広がりが期待される。

佳作

「2020東京大会に向けて全国・全世界に発信したい三島－沼津間6.6㎞の道」

静岡県立沼津城北高等学校

情報メディア部

静岡県初の民営電気鉄道、伊豆箱根鉄道軌道線が三島、沼津間を走ったその廃線跡の調査から、路線が旧東海道に沿ったものであることを確認したのが研究のスタートだという。そこに歴史・伝説・文学などにゆかりの史跡が多い事を知り、実際に現地を歩いて調査を行い、その場所にまつわる歴史や言い伝えを丹念に記述していて読み応えがある。わずか6.6km の間に、これだけ豊かな歴史と文化が息づいていることを知った驚きと喜びが、豊富な写真とともに伝わってくる。

佳作

「自分たちの足元をみつめる　～我が家のお雑煮から“今”を考える～」

愛知県立杏和高等学校

旧2年3組お雑煮調べ隊

クラスの仲間が持ち寄った雑煮のレポート29件をもとに、角餅か丸餅かといった餅の形や調理法など五つの視点から比較し、その特徴を描いている。文献調査から餅の形状や味付け、具の種類に地域性があること

を確認し、自分たちが調べた具体的な事例についてその背景を考えている。そして、そもそも雑煮とは何か、年の初めに食べることにどのような意味があるのか、正月に歳をとることと数え年との関係など、雑煮をめぐる多様な民俗文化に関心が広がっているのがわかる。

■個人の部

最優秀賞

「漬物で語る　～『知らない』と『忘れる』に立ち向かう人々～」

愛知県立杏和高等学校

飯田　真世

昨年に引き続き萱津神社の香の物祭りについて調査・研究した成果である。香の物を漬けなおして美味しい漬物にする試みをしている「結の会」の女性三人からの話と、今年の香の物祭りについて報告している。聞き書きでは、塩のみでつけられものを漬けなおすむつかしさや苦労、技術的な過程について、じつに細かく具体的に描いている。飯田さんの質問が上手で、女性たちとのやり取りそのもののなかに、漬けなおしの現在の姿が浮かび上がってくる。聞き書きという方法が力を発揮しているとともに、着眼点がよい。

優秀賞

「福井県敦賀市の伝統行事、「敦賀まつり」について」

東京・広尾学園高等学校

荒殿　一花

敦賀市の気比神社の例祭「敦賀まつり」について調べたものである。敦賀市は一花さんの祖父の出身地。久しぶりに訪ねた町は人口が減り寂しくなっていたが、活気に満ちたお祭りが行なわれていることに気づき、このテーマを取り上げたという。関係資料をよく読んで、室町時代末には成立していたという山車の歴史的変遷や現在の祭礼について的確にまとめている。次回はぜひ祭りの時に訪ねて、一花さんの目で見た祭りの姿や敦賀の文化についての調査を期待したい。

優秀賞

「変化していく音頭　～音頭から始まる流行音楽のかたち～」

愛媛・済美平成中等教育学校

武井　千夏

「河内音頭」や「東京音頭」など、夏の盆踊りでは今も多くの人が歌って踊る光景を見かける。古くは雅楽のオンドウから派生したといわれる音頭が、現在においてどのように展開しているか、アニメの影響をはじめ多面的な視点で描きだしている。武井さんの地元の「松前音頭」の歌詞には、旱魃のときに農民を助けた義民作兵衛や水乞に尽力したおたたさんなど、町の歴史と民俗が歌い込まれていて興味深い。他の音楽との違いや、海外での展開にも視野を広げていて示唆に富む内容になっている。

佳作

「関西弁は日本語習得の良いツールとなりえるのか～外国人の第二言語習得からみた関西弁～」

東京・渋谷教育学園渋谷高等学校

弓場　鈴響

外国人が日本語を学ぶときに、関西弁はどれだけ身につけやすいのかという課題を設けて調べたもの。論旨の展開とともに文章が整然と叙述されていて無駄がない。関西弁は母音がはっきりしていて、聞き取りやすいために外国人にとっては発音しやすい面があることを述べ、反面でイントネーションの高低差が複雑で、その変化を習得する点では高いハードルがあることも指摘している。言語学者の研究を積極的に参照しながら、また、留学生へのインタビューを交えて手際よくまとめている。

佳作

「報恩の民『台湾少年工』は日本統治時代における犠牲者でしかないのか」

神奈川県立横浜国際高等学校

矢川　優里

第二次世界大戦末期に、高座海軍工廠で戦闘機などの製造にあたった台湾少年工について、当時の厳しい現実や、戦後の交流について描いている。両親のアドバイスを得て、関連する資料によく目を通し、元少年工だった人たちの証言や手紙などをもとに、空襲による恐怖や台湾に帰ってからの困難な生活、やがて結成される台湾高座会と日本の関係者たちとの心温まる交流の軌跡をたどっている。矢川さん自身の目からその実態をとらえ、本来の姿を描くことに力を注いでいる。